

第七講 第二次大戦後の変化

レポート5の講評

歴史学は史料批判を用いて過去の事実を確定し、主観を排除して、或は個人の偏見にとらわれず、客観的で「正しい」歴史を構築しなくてはならないというレポートが多く見られた。個人の偏見でなく集団の偏見なら良いのか？それに歴史学は「正確」だけで良いのか？ここで言われている「正しい」とは「正確」という意味なのか倫理的・道徳的に「正しい」という意味なのかを考えて欲しい。「正しい」には二重の意味があり、通俗的には過去に正しい歴史があり、同時に正しくない、誤った歴史があるところから過去に教訓を求めるという月並みな言葉が再生産される。

歴史に教訓を求めるとするのは、過ちを繰り返さないという意味を反映したものである。それは過去が未来において繰り返されるという、一種の歴史の循環を前提としている。丁度、プラトンが『国家』第8巻で論じ、『テアイテス』で歴史は3万6000年の周期で循環すると考えたように。

その上で、倫理的・道徳的に「正しい」「間違っている」というのは、過去を評価する個人が所属する共同体の倫理や道徳、時には政治から演繹されていないだろうか。問題はその倫理的・道徳的判断の基準となる共同体が時代と社会、文化の産物であって、絶対的存在ではないということである。特に倫理道徳の基準となっているのが現代社会においては民族国家という共同体であることを想起しておく必要がある。その歴史性はベネディクト・アンダーソンによって指摘されているし、現代の多文化的状況、国境を越えて広がっていく人々や文化の拡散と伝播を想起すると民族国家に根差した倫理道徳によって過去を判断することの限界は明白である。

その意味で「国家を超えた観点から」歴史的事実を出来るだけ正確に解明していくことが大事だと指摘しているレポートがあったが、これは注目すべき重要な指摘であると言えよう。

その反対に「正しい」を主観の排除と位置づけ、歴史学は「事実のみを追求」すべきだというレポートも随分とみられた。でも本当に事実のみを追求して歴史は書かれ得るのか？

或いは未来に役立てる学問と位置づけ、
歴史の中のイフは意味がないとされているがそれは何故なのか分かる
だろうか？

「歴史なんて役に立たない」という意見に対して反論するレポートがあ
った。では歴史は何の役に立つのだろうかを考えて欲しい。

その答えが「未来をより良くする」ということであるとするなら過去の
断片的な利用に過ぎないし、最初から目的を持って過去に向かっていくと
いうことになる。自分に都合の良い（あるいは都合の悪い）事実の側面に
しか関心を持たないということになる。過去は自分の都合のためにだけ存
在しているのだろうか？

それが「歴史の教訓」だとしたら過去は本当に教訓になりうるのだら
うか？少なくとも近代歴史学では歴史は繰り返さないと考えている。繰り返
されないがゆえに数式に還元できないし、法則化をすることもできない。
これまで「事実」の解釈に基づいて過去を再構成しようと歴史家たちは努
力してきた。歴史を未来に役立てるべきだという意見もあったが、歴史家
が未来を予測し、提言するというのは本来の使命ではない。確かに天候異
変と飢饉の記録、地震の記録や津波の記録、火災と被害の記録など、歴史
の記録は役立てられることがあるが、それは歴史以外の分野の人々が活用
すべきものであるし、そのような記録は歴史の繰り返しを意味しているの
だろうか？一例を挙げればギリシアで農業が導入されて千年後に各地で
土砂災害を引き起こしているが、だからと言って農業をすれば環境破壊を
もたらすとはならないだろう。内容不明である。

何れにせよ教訓を得ることが歴史の目的ではない。そのように利用され
ることは否定しないが、過去を以て未来を構築するというのは、過去と未
来の間の変化や相違、それぞれが違った世界であるということを見捨てる
ことになり、ある意味有害な側面もあることに注意しなくてはならない。
「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ。」という言葉を好んで引用して
いるが、ビスマルクは必ずしも歴史を指して言っているわけではない。ビ
スマルクの言葉は「**Nur ein Idiot glaubt, aus den eigenen Erfahrungen
zu lernen. Ich ziehe es vor, aus den Erfahrungen anderer zu lernen, um**

von vorneherein eigene Fehler zu vermeiden.(愚者だけが自分の経験から学ぶと信じている。私はむしろ、最初から自分の誤りを避けるため、他人の経験から学ぶのを好む。)」であり、「歴史」ではなく「他人の経験」なのだ。

人類が進歩する手助けをすべきだという意見もあった。しかし何が進歩の手助けになるのか、

歴史叙述はこれまでもあったし、これからもあるだろう。また過去を記念碑化することもあったし、これからもあるだろう。しかし学問としての歴史はどうか？

「先人たちの考えや苦労を正しく理解することが大切だ」というレポートもあった。では何故我々は「先人たちの考えや苦労」を理解しなくてはならないのか？疫病の流行、飢餓、名を惜しんで西海の藻屑と消えた平家一門の人々の「考えや苦労」をなぜ今理解しなくてはならないのか？それが現代の豊かさに対するアンチテーゼとして提示されているとすれば尚更のことである。

さらに、「歴史の真実性」を後世に伝えていくというレポートもあったが、「真実性」と我々が言っているものも歴史を構成しているパラダイムが変化していけば「真実性」も色あせてくることもあることも注意してほしい。

要するに今回のレポートの主旨は学問としての歴史学はいかにあるべきなのかということ問うものである。なぜ学問として成り立ちうるのか、また学問でなければならないのかを考えて欲しかった。なぜ史料解釈に恣意性を排除しなくてはならないのか、このこととも関連してくる。私たちが歴史を研究するのに文化を理解するのが重要だというのは、これらの記録を残した人々が現代人ではなく、私たちと価値観や考え方、倫理道徳を必ずしも共有していないということによる。

その上で今歴史学は「国家」或いは我々が所属している「共同体」から独立することができるのか、という問題がある。

学校における社会科教育

アメリカ流の社会科教育の導入
大学に社会学部の設置
アメリカ流の社会学の紹介
ワイマール期のヒンツェやローゼンベルクの研究の逆輸入
ドイツにおける社会史研究の広がり

第二次世界大戦後のドイツ史学

フィッシャー論争の衝撃

F・フィッシャー（村瀬興雄 訳）『世界強国への道 - ドイツの
挑戦 1914-1918』岩波書店、1972 年／83年。

ハンブルク大学教授

ドイツ外務省の文書：ドイツの東方政策を記す

ベートマン・ホルヴェークの 1919 年 9 月 9 日付の「九
月計画」を発見

（従来の定説）

ナチスによる侵略は弁護の余地はない

カイザーのドイツ帝国は複雑な外交関係の網にかかって不承不
承戦争に引き込まれていった

ビスマルクによる複雑な同盟網（1882三国；1887再保障；1890更新拒否）

オーストリアとの同盟関係

三国協商（1894露仏；1902日英；1904英仏；1907英露）

バルカン半島における汎ゲルマン主義と汎スラブ主義の対立

皇帝は戦争を望んでいなかった

（フィッシャーの批判）

ドイツ外務省の文書：ドイツの東方政策を記す

フィッシャー：ドイツは積極的に戦争政策を推進した

研究方法は極めて伝統的

フランスにおけるアナル学派

アメリカにおける計量史学

日本における社会経済史

日本における講座派と労農派の論争

コミンテルンの「27年テーゼ」

未成熟な資本主義・半封建的国家

君主制（「33年テーゼ」では天皇制）

二段階革命

プロレタリアートや農民の主導権

日本において資本主義的關係は成熟していたのか

講座派：明治維新：封建的土地所有の単なる再編

絶対主義、半封建的地主制・近代資本主義社会

二段階革命論：ブルジョワ民主主義革命→社会主義革命

野呂栄太郎、平野義太郎、山田盛太郎、羽仁五郎、服部之総ら

『日本資本主義発達史講座』（1932-33）

→大塚久雄

労農派：明治維新：不徹底なブルジョワ革命

資本主義の発展

天皇制：ブルジョワ君主制

一段階革命論

堺利彦、山川均、猪俣津南雄、荒畑寒村、向坂逸郎ら

『労農』

→大内兵衛、宇野弘蔵

階級闘争史観

日本社会の非合理性・後進性を強調し、革命による近代化を希求
英米などの西欧を理想化

革命史への傾斜

清教徒革命・アメリカ独立革命・フランス革命・二月（三月）

革命

ロシア革命

ワット・タイラーの乱やジャックリーの乱・スパルタクスの乱
国民史の枠を超えず

大塚史学

大塚久雄（1907－1996）

東京大経済学部

『近代欧州経済史序説』時潮社、1944年。

『共同体の基礎理論』岩波書店、1955年。

マルクス経済学とウェーバー社会学

国民史の枠組みの中の近代化

独立自営農民（ヨーマン）層の解体

産業市民層の台頭

高橋幸八郎（1912－1982）

東京大学社会科学研究所

『市民革命の構造』お茶の水書房、1950年。

近代化への二つの道：「封建的土地所有者＝前期資本家層」の主
導する道

「独立自営農民＝産業的中産者層」の主導する道

との対抗

アンシャン・レジーム期のブルジョアジー：既存体制に癒着

社会史への転換

阿部謹也（1935－2006）

一橋大学出身

ドイツ中世史

上原専禄（ヨーロッパ中世史）・増田四郎（ドイツ中世史）

『ハーメルンの笛吹き男 - 伝説とその世界』平凡社、1974年。

『ドイツ中世後期の世界 - ドイツ騎士修道会史の研究』

未来社、1974年。

伝承から歴史の核心を探る

聖ヨハネの日に起きた事件がコア

ネズミ取り男（漂泊の賤民）

アナル学派

二宮宏之などにより紹介

柴田三千雄、遅塚忠躬、二宮宏之「『社会史』を考える（社会史<特集>）」『思想』663、2-24頁、1979年。

二宮宏之・樺山紘一・福井憲彦（編）『叢書歴史を拓くアナル論文選1／魔女とシャリヴァリ』新評論、1982年。

『家の歴史社会学』1983年、『医と病い』1984年、
『都市空間の解剖』1985年

『社会経済史年報 *Annales d'histoire économique et sociale*』誌

大人物ではなく民衆など名もない人々に目を向ける

長期持続、民衆の生活文化や、社会全体の「集合記憶」

政治的事件を表層と位置付ける

経済学、統計学、人類学、言語学などを利用

第一世代：リュシアン・フェーヴル『ラブレールの宗教』：「集合心性 (mentalités collectives)」を扱う

マルク・ブロック『王の奇跡』

第二世代：フェルナン・ブローデル『地中海』（博士論文：原題

『フェリペ2世時代の地中海と地中海時代』）：波長の異なる三つの時間的うねりの組み合わせ。

長波（長期持続 *longue durée*）：長期にわたって維持される自然や環境、構造。

中波：局面、人口動態、国家、慣習。

短波：出来事。

第三世代：エマニュエル・ル・ロワ・ラデュリ

数量史や価格史・歴史人口学など

人口動態の推移

A局面：17～18世紀前半・・・人口停滞

高出生率・高死亡率（特に幼児死亡）・・・平均年齢30歳未満

結婚の抑制・制限（高年齢での結婚。特に女性）・多数の独身者の存在

飢饉、栄養不良、疫病（天然痘・コレラ・ペストの流行）

ルイ 14 世時代のフランス

1 歳未満での死亡：25%

成人までの生存率：50%

40 歳までの死亡率：75%

松浦静山（平戸藩主・『甲子夜話』）

17 男 16 女

B 局面：18 世紀後半～19 世紀前半・・・人口急増

高出産率・低死亡率

結婚年齢の低下

医療の改善、海外からの食糧輸入、栄養の改善

階級による死亡率の差

日本の人口動態

奈良時代：451 万人、平安時代初期：551 万人、平安時代末期：684 万人、
室町時代中期：1005 万人、江戸時代初期：1227 万人、江戸時代中期：3128
万人、明治時代初期：3330 万人

（鬼頭宏『図説人口で見る日本史 縄文時代から近未来社会まで』PHP 研
究所、2007 年より）

アナール以降

ミクロ歴史学（イタリア）

カルロ・ギンズブルグ：『チーズと蛆虫』

メノッキオという粉屋のおやじを対象

言語論的転回（アメリカ）

言葉は現実からつくられるのではなく、現実言葉からつくられる

昔日本には緑はなかった

あったのは「黒い」、「白い」、「赤い」、「青い」など「～い」で

終わる

緑は外来語・・・緑信号ではなく青信号

虹

日本・・・7色：赤、橙、黄、緑、青、藍、紫

イギリス・・・5色：赤、黄、緑、青、紫

アメリカ、ドイツ・・・6色：赤、オレンジ、黄、緑、青、紫

ジンバブエ・・・3色

リベリア、沖縄・・・2色

歴史は虚構と現実に股をかけた言説

歴史学は文学の一つのジャンル

歴史とはつねにひとつの物語